

三河の国の入道

山田 結真

昔むかし、今からもう四、五百年もむかしのことだが、三河の国（現在の愛知県）に入道坊主が住んでいた。入道坊主というのは坊さんのような姿をした妖怪で、最初は三尺（約一メートル）足らずの子どもくらいの大きさしかない。だが近づいていくとどんどん巨大になり、最後には一丈（約三メートル）もの大きさになるといふ。この妖怪がどんどん大きくなるのを見上げていると、しまいは転んでしまう。これが山道で旅人や、お地蔵様を拝みに来た村のものたちをびっくりさせては楽しんでいた。

その日も、村のものが道を歩いてくるのを見て、入道坊主はにんまりした。その村人は、まんじゅうを持ってお地蔵さんにお参りにくるところだった。

入道坊主は、さりげない感じで道の真ん中

に立った。いかにも、今向こう側の道からや
つてきて、少し休んでいるところだとも言
わんばかりだ。村人は少し顔をあげて、入道
坊主がいることに気がついた。村人が少し近
づく、と、入道坊主はぐん、と背をのばした。
村人がおかしいな、見まちがいかな、と思っ
て近づく間に、今度はぐんぐん、ぐんぐんと
背をのばした。村人がこれはおかしいぞ、と
思い始めたとき、とうとう入道坊主は一丈の
大きさになつてゲタゲタと笑った。村人はび
っくりぎょうてんして、まんじゅうの包みを
落として一目散に逃げていった。

「やあ、こいつあもうけたな。悪く思わない
でくれよ、お地藏さん」

入道坊主は、村人が落としていったまんじ
ゅうを拾うと、自分の家へ持って帰った。

入道坊主はだれも住まなくなった空き寺に
一人で住んでいた。そこは荒れはててはいた
が、入道坊主にとってはずてきなわが家だつ
た。入道坊主は寺にもどつて、縁側で村人か

らくすねたまんじゅうを食べた。

また別の日、入道坊主は歩いてきた村人をおどかさうと木の影にかくれていた。そこはちようど、村人の通る山道を見下ろせる場所にあつた。

「なあ。入道坊主の話、聞いたか」

一人目の村人が言った。なんだ、二人連れだったのか。入道坊主はガツカリした。二人連れをおどろかすのはむずかしい。一人がおどろいている間に、もう一人になぐられるなんてこともありえる。入道坊主が帰りかけたとき、もう一人の村人が言った。

「ここら辺に入道坊主が出るって話か？ 有名だよな」

「ちがう、ちがう。新しい入道坊主が出たって話だよ。ここらへんに出る入道坊主は、黒い着物で一つ目のやつだろ。最近出たやつは、品のええ青い着物を着て、目は三つらしい」

入道坊主は自分の耳を疑った。もう一人の

入道坊主だって？　今まで、自分以外の入道坊主なんて会ったことがなかった。もしもそいつに会ったら、どうしたら良い？　自分は今までおどかさず方だったのに、こんどはそいつにおどかさされるかもしれない。そいつよりも大きくなって、おどかすことができるだろうか。

入道坊主はたいへんにあわてた。今まで、一丈以上大きくなったことはなかった。たいていの人間は、それくらい大きくなれば腰をぬかすからだ。でも、相手が同じ入道坊主だったら？　相手がどんどん大きくなったら、こっちはそれ以上大きくなれないといけない。いったいどれくらい大きくなれるのか分からなかった。あんまり大きくなったら、自分の頭の重さで転んで、立ち上がれなくなるかもしれない。もっと悪いことには、相手のほうが自分よりずっと大きくて、こちらが見上げなければならなくなるかもしれない。入道坊主は村人をおどかすのも忘れて、一目散に寺

へもどった。

入道坊主には一人だけ話し相手がいた。それは、住処にしている寺の庭に生えた立派なクスノキのウロに住む、家鳴りだった。家鳴りというのは家をガタガタゆらす小さな小鬼のことで、ふつうは何びきもがいつしよになつて仕事をする。でも、この寺に人間が住まなくなつてからはすることもなくなつたので、他の家鳴りはみんな新しい家を求めて山のふもとの村へ降りていった。こいつだけは、わざわざよつてたかつて人間をおどかすためだけに引っこすなんて馬鹿馬鹿しいと思つたので、一人でクスノキの中に残つていた。

「おうい、いるか」

入道坊主はクスノキのウロに向かつてさげんだ。家鳴りはとても小さく、暗いウロの底の方に住んでいたので、姿はほとんど見えなかつた。

「そんなに大声を出すなよ。ここは音がひび

くんだ」

家鳴りがキンキン声で言った。入道坊主はウロの中に頭をつつこんで、ボソボソとしゃべった。

「なあ、おれの他にも入道坊主がいるみたいなんだ」

「そりゃいるだろう。おれの他にも家鳴りがいるみたいに」

「でも、今まで会ったことないんだよ。ほかの入道坊主なんてさ。それなのに今日、村の人間があたらしい入道坊主がこのあたりに出るっていうんだ」

「なんだ、なわばり争いか？ 犬っころじやあるまいし」

家鳴りはくだらないとばかりに鼻を鳴らした。

「そいつに会ったらどうしたらいい？ そいつが、おれより大きかったらどうしよう？」

入道坊主は早口でまくしたてた。それから、少し言葉につまって息を吸った。

「おれ、本当は自分がそんなに大きくないと知られるのがこわいんだ」

入道坊主は消え入りそうな声でぽつりと言った。声に出すと、よけいにおそろしくなつた。家鳴りはややあつて言った。

「なあ、何もむずかしく考えるこたあないよ。相手に負かされるのがいやなら、友達になりやいいんだ。そのためには――」

「友達？ どうやって友達になるんだよ？」

入道坊主はあわてて言った。

「まあ、そうあわてなさんな。今からそれを教えてやろうってんだから」

家鳴りは社交的な性分ではなかったが、仲間と暮らしていたこともあるので、友達つてやつのも多少は心えていた。少なくとも、ずっと一人で暮らしている入道坊主よりはましだった。

「そうだな、まずはあいさつをする。あいさつもせずにいきなりおどかすつてのは、よくないからな。あいさつもせずにおどかしてく

るやつと友達になりたいっていうやつはあんまりいないしー」

「なんだか人間が子どもに教えるみたいなやり方だなあ」

入道坊主は家鳴りが言い終わるのを待たずに言った。入道坊主には、あまりにもたいくつな方法に思えた。

「それが人間の生きる知恵なんだよ。人間つてのは、徒党を組む生き物だからな」

家鳴りはフンと鼻をならした。入道坊主は「徒党を組む」の意味はよく分からなかったが、何か人間の持つ、生き残るためのひけつらしいというのは分かった。

「それから、お前のその格好がよくない。着物だって、何年着たきりなんだ。ここからでもにおいがすごくて、鼻がまがっちまう。たまには水浴びや洗たくでもしたらどうだ。体をきれいにするってのは、いいもんだよ」

入道坊主は、自分の着ている麻の着物をかいた。それは入道坊主のお気に入り

ようらだったが、たしかに長年洗っていないので変なおいがする気がした。

「身ぎれいにして、あいさつする。これさえできりや……」

「ほんとにそんなことで友達になれるのか？」

入道坊主はどうにも不安でたずねた。

「さいごに、一番大事なのは」

家鳴りはいらいらしながら言った。

「人の話をやたらにさえぎらないことだな」
入道坊主はだまっとうなずいた。それから、さっそく言われたことをやってみよう、と歩き出したが、はっと気づくとクスノキのところへもどって行って、もう一度ウロに頭をつっこんだ。

「でも、もしむこうがおれと友達になりたくなかったら？」

家鳴りはやれやれとため息をついた。

「そうしたら、『さようなら』ってきちんとあいさつして別れりやいいんだ。きちんとあ

いさつした相手をおどかさうとしてくるやつ
はいない。いや、いたとしても、それはそい
つがいやなやつなだけだ。むこうがいやなや
つだつて、こっちはぎょうぎ良くしてりやあ
いいんだ」

入道坊主はうなずくと、今度こそ水浴びを
しに出かけていった。

入道坊主は、ふだんは果物を冷やしておく
のにしか使わない川へ歩いていった。夏の日
差しのなかで、川はとてもきれいに見えた。
入道坊主はおそるおそる水に足をつけて、そ
れから思い切って全身で飛びこんだ。水をば
しやばしややると、冷たいしぶきがきらきら
とはねた。水浴びはたしかに気持ちよかった。
なんだか体じゅうがさっぱりとして、目がさ
める思いがした。それから入道坊主は、自分
の着物をぬいでじゃぶじゃぶと洗った。着物
からは茶色い水が出てきて、洗い終わるとぜ
んぜんちがう色になった。

着物を洗い終わると、入道坊主は自分の体をごしごし洗った。足のつめにはさまっていたよごれも、耳の裏もぜんぶきれいになった。着物をかわかす間、入道坊主は日光浴を楽しんだ。川の近くの原っぱは、見晴らしもよくて気持ちよかった。日の光が良く当たって、ぬれたばかりの体をあつという間にかわかった。うん、たしかにこれは良いものだ、と入道坊主は思った。入道坊主はもう一人の入道坊主に会う日に備えて、水浴びと洗たくをするようになった。

「どうだい。おれ、ちつとはましになつたらう」

入道坊主は、家鳴りの住むクスノキに来て言った。いまでは、いつもどろで汚れていた入道坊主の顔もピカピカだった。着物の汚れも落ちて、なんだか軽くなったような心地がした。

「うん。いいじゃねえか。自分をだいにす

るって言うのは、気持ちのいいもんだろう」
家鳴りが言うと、入道坊主は一つしかない
目をぱちくりさせた。

「これって、そういうことだったのか？ て
つきり、おれ以外の入道坊主に会ったときに
いやな気持ちにさせないためかと思ってた」
「まあ、それもあるがな。それより、自分が
気持ちよくすごせることのほうが大事だ。だ
れだって、気持ちよくすごしているやつと友
達になりたいだろ」

友達のいたことのない入道坊主にはよく分
からなかった。「そんなもんかね」と言うと、
家鳴りはウロの中から言った。

「それに、たとえ例のやつと友達になれなく
ても、どうやったら自分が良い気持ちですご
せるかわかったんだから、どちみち損はしな
いってわけさ」

そして、とうとうその日がやってきた。入
道坊主がいつものように山道を見張っている

と、青い着物の坊主頭が歩いてきた。これは
もしや、と思つて入道坊主が目をこらしてい
ると、その人影がキョロキョロとあたりを見
回した。そして入道坊主はその顔をハッキリ
見た。三つ目だった。まちがいない。こいつ
がもう一人の入道坊主だ。入道坊主は息を整
えた。あいさつする。ぎょうぎよくする。そ
れだけだ。むずかしいことじゃない。

入道坊主はそろそろと山道へ降りていった。
顔を上げると、三つの目と目が合った。二人
はしばし、だまつておたがいを見ていた。

「……こんにちは」

入道坊主はややあつて言った。なんだか変
なかんじだった。

「……こんにちは」

三つ目の入道はおどろいたようだったが、
ぎこちなくあいさつを返した。よし、あいさ
つはできた。

「おれ、ここらへんに住んでるんだ。あなた
は？」

入道坊主は努めてあいそよくたずねた。

「おれは最近、ちがう山からここにこしてきたばかりだ」

三つ目の入道は、しげしげと入道坊主をながめた。

「あんたも入道坊主なのか」

「そうだ。おれ以外の入道坊主には初めて会ったよ」

「おれもだ」

三つ目がうなずいた。

「あんた、名前は？」

入道坊主が聞くと、三つ目は三つの目を見開いた。

「名前なんて、聞かれたことがなかった。だれかに名前を呼ばれたことなんてないから、名前なんてない」

そう言われてはじめて、入道坊主は自分も名前がないことに気がついた。気がつくとき、急に名前がないのは不便な気がしてきた。

「じゃあ、おれがあんたの名前を考えてもい

いか？　そうしたら、あんたの名前を呼べる。
それで、お返しにおれに名前をつけてくれ」
入道坊主が言うのと、三つ目はこくりとうな
ずいた。入道坊主はしばらくウンウンなやん
だあと、そいつに「みつ」という名前をつけ
てやった。なぜなら、目が三つあったからだ。
それで、みつの方は入道坊主に「いち」とい
う名前をつけた。二人とも、これはたいそう
いい名前だと思った。

「みつ」

いちが呼ぶと、みつははずかしそうに「う
ん」と言った。みつに「いち」と呼ばれると、
いちには背中がむずむずするような気持ちやし
たけれど、それは悪い気持ちではなかった。
　　いちは、みつの目をじっと見た。みつはい
ちと同じくらい背丈だった。今までずっと
人間を見下ろすだけだったが、目と目が同じ
くらいの高さにあるのはいいものだった。み
つとは友達になれそうだ、といちは思った。
　　いちのみつに、水浴びするのに使っている

川や、着物をかわかす間に昼ねするのにちよ
うどいい場所を教えてやった。みつの方は、
ムクロジの実の皮で洗たくするやり方を教え
てくれた。みつはずいぶん物知りだったので、
みつから色々教えてもらうのは楽しかった。

それから、いちはずいぶん住んでいる寺にみ
つを連れて行ってやった。庭先ではさるすべ
りが花をさかせていて、ムクドリが走り回っ
ていた。いちはずいぶん、冬になったら南天の
実を鳥たちがつまみにくることや、うずらが
遊びに来ることを教えてやった。みつといち
は、庭でいろんな遊びをした。花くずをかご
いっぱい集めて頭からかぶったり、ぞうり
を木の上までけて飛ばしたり、くだらない
遊びだったが、楽しかった。それから、二人
で縁側でただだまって座った。だまって座っ
ているのが一番楽しかった。

そのうち、二人は空き寺でいっしょに暮ら
しはじめた。いちはずいぶん、みつと遊んでい
るほうが、人間をおどかさよりもずっと性に合っ

るということに気がついた。そもそも、どうして自分が人間をおどかし始めたのかもよく覚えていなかった。

いちがみつと暮らしはじめてしばらく経ったある日、とてつもない台風の晩がやってきた。ひどい雨と風に、みつといちは不安なまま夜を過ごしていた。風は山ごとほりかえしてしまいそうなほどで、とうとう家鳴りの住んでいたクスノキを根元からたおしてしまった。家鳴りは二人の住む寺へひなんしてきた。

「ひどいあらしだ！ おれはもう三十年もあの木に住んでたんだぞ。ひどい、ひどい」と言って家鳴りが泣きわめくので、みつといちは困って、ところどころ破れた竹編みのかごの中に家鳴りを入れてやった。ウロの形に似ているから、少しは落ち着くだろうと思ったのだ。家鳴りはしばらく文句を言っていたが、やがて泣きつかれてねむってしまった。

二人がやれやれと一息ついたとき、寺の戸

をたたくものがあつた。

「もし、旅のものですが、とめてくださいませんか」

みつといちは顔を見合わせた。この寺がロボロなのは見れば分かるはずだ。こんなところにとまりたいというのは、どんなやつだろう。みつといちは二人して戸を開いた。

そこには大きなふろしきづつみを背負った男が一人立っていた。旅人はいちの一目とみつの三つ目を見ると、「おや」と言った。それからしゆるしゆると縮んで、タヌキの姿になった。変化の技を使う、ばけタヌキだ。みつもいちも、新しい妖怪の仲間にあうのは久しぶりだった。二人はタヌキをまねき入れ、一晩とめてやることにした。二人は晩ごはんを用意して、タヌキをもてなした。

「なんだって、こんな夜に旅なんてしてたんだい」

タヌキにおかゆをよそってやりながら、いちが言った。タヌキはおかゆを受け取ると、

ぶるぶるとふるえながら実にくまそうにおかゆをすすった。

「はあ、実はここからだいぶんはなれた山に住んでいたんですが、そこはダイダラボッチがつくった山なんです。だからダイダラボッチはすぐくえばついで、みんなを自分のいなりにしようとするんです。それがいやなら出てけと言われました。山から出ていかなければなら巣穴ごとほり起こして、海に捨てちゃうぞって言うんです。それで、命からがら逃げだしてきたというしだいで」

ダイダラボッチというのは、山よりも大きな巨人のことだ。いち話を聞いたことはあったが、本物を見たことはなかった。

「あいつはとんでもないやつです。山に住んでいるものは妖怪でも動物でも、いじめて追い出しちまうんです」

タヌキはおいおいと泣きながら話した。住みかから追い出されたのが、よっぽどくやしかったのだろう。

「お前さんの住んでいた山は、石巻山というんじゃないかね」

今までだまっていたみつが、ものものしい顔で言った。

「まさしくその山でございます」

タヌキはうやうやしく言った。みつはいちに引き直って言った。

「それこそ、おれが住んでいた山だ。おれが前に住んでいた山を出てきたのは、そういうわけなんだ。おれがどんなに大きくなつたつて、ダイダラボッチにはかなわないからな」
「いちはそのを聞いておどろいた。そういえば今まで、どうしてみつがこの山にやって来たのか聞いたことがなかった。」

「そうか。あいつはまだそんなことをしてるんだな」

「はい。このままだと、あの山にはあいつ以外だれもいなくなってしまうよ」

タヌキはなみだをぬぐって言った。みつは難しい顔でそれを聞いていた。

朝になると、タヌキは二人に礼を言っ出ていった。この山は良いところみたいですから、また新しく生活を始めますよと言って頭を下げた。みつといちの二人は縁側に座って台風にめちやくちやにされてしまった庭をながめた。クスノキがたおれているを見て、いちはずつと昨日の夜の家鳴りの落ちこみようを思い出した。ずっと住んでいたところに住めなくなるというのは、つらいだろうなあと思つた。タヌキを山から追い出したダイダラボツチというのは、いったいどれくらい大きいんだろうか。だれだって山から追い出してしまえるくらいだから、だれよりも大きいにちがいない。

「なあ、そのダイダラボツチというやつをやっつけにいかないか」

いちがだしぬけに言うと、みつは三つの目をぱちくりさせた。

「なんでそんなことする必要がある？ おれたちにや関係のないことだ」

「だって、そいつは今でも山に住むやつら
いじめてるんだろう。かわいそうじゃない
か」

いちはその言ったが、ほんとうのところは
ダイダラボッチがどれくらい大きいのか見て
みたいという気持ちだった。

「二人ならきつとダイダラボッチをたおせ
る」

「どうやって？　ダイダラボッチはとんでも
なく大きいんだぞ」

みつはむずかしい顔をした。同じ入道坊主
のみつですら「とんでもなく大きい」と言う
んだから、ダイダラボッチってのはほんとう
に巨大らしい、といちは思った。

「手長足長って妖怪がいるだろ。足の長い足
長のかたの上に、手の長い手長がのってるん
だ」

いちは、足元の地面に木の枝で手長足長の
絵をかいてみせた。

「ああいうふうに、お前がおれのかたにのる

か、おれがお前のかたにのるかすれば、ダイ
ダラボツチより大きくなることだってできる
かもしれない」

いちはしんぼう強くみつを説得した。

「だって、せっかくあいつのいないところに
来たのに」

みつがベそをかきそうになったので、いち
は少し悪い気持ちになった。けれども、いち
が「なあ、たのむよ。後生だから」とすがる
と、とうとうみつもこうさんし、二人はダイ
ダラボツチをたおしに行くことにした。二人
は旅の仕度をととのえると、寺を後にした。
いちが自分の住む山からはなれるのは、これ
が生まれて初めてのことだった。

二人は野をこえ山をこえ、ついに石巻山へ
やってきた。みつは自分の生まれ育った山を
見て、なつかしそうに三つの目を細めた。

「おれたち、本当にダイダラボツチより大き
くなれると思うか」

みつが不安そうに尋ねた。

「わからない」

いちほは小声で答えた。いちほは、もうずいぶんと長いこと、大きくなっていなかっただ。みつといちほでいるときは、人間をおどかしていなかっただので、大きくなる必要なんてなかつたからだ。それに、みつが大きくなつたところを見たこともなかつた。いよいよダイダラボッチに会うことになる、いちほは急におそろしくなつた。みつの言うとおりに、ダイダラボッチより大きくなれるかなんて分からない。二人はさつそくダイダラボッチを探したが、どこにも見当たらなかつた。なんだかへんだ、とみつが言つた。ダイダラボッチは山よりも大きい巨人なのだから、探さなくたつて目に入るはずだ。

二人はダイダラボッチを探して、とうとう山の頂上にほど近い場所までやつてきた。

「おうい。ここの山に、ダイダラボッチつてのがいたろう」

みつは近くの檜の木にとまっているカラスに呼びかけた。カラスはびっくりした顔で二人を見た。

「ダイダラボッチなら死んだよ」

カラスは木から飛びたち、大きな石の上にひよいととまった。

「この間、台風の晩があつたろ。あのとき、雷に打たれて死んじまったんだよ。ここがやつ墓さ。あつけないもんだ」

カラスはそう言つてカカア、と笑つた。それから、さつとどこかへ飛んでいってしまった。

みつといちは、顔を見合わせた。それから、二人一緒にふきだして、ゲラゲラと笑つた。二人はぜんぜん大きくなる必要なんてなかつたこと、自分たちがダイダラボッチより大きくなれるかどうかなんて心配しなくて良かったことを知つた。二人して、ダイダラボッチの墓の上で踊つた。ダイダラボッチの墓は、ちっぽけだった。それがよけいにおかしかつ

た。人間ならこんなことをしたら顔をしかめるだろうが、二人は人間ではないのでまったく平気だった。

そのとき、いちのふところから家鳴りがぴよんと飛び出してきた。

「おまえ、こんなところにいたのか」

いちが驚いて言った。家鳴りはいちとみつのことはまったく気にせずに、辺りを見回した。

「なかなか良い山じゃないか。それに、この木にはなんとも居心地よさそうなウロがある」

家鳴りは近くにあったクスノキのウロにぴよんと飛び込んだ。いちはウロの中をのぞきこんだ。ウロは暗くて深いので、家鳴りの姿はもう見えなかった。

「うん。ここはちょうどいいウロだな。ちょうどよくせまくて、ちょうどよく暗くて、ちょうどよくジメジメしてる」

家鳴りがウロの奥のほうで、まんぞくげに

言っているのが聞こえた。

「ここに住むつもりなのかい」

いちがたずねると、家鳴りが答えた。

「ああ。つれてきてくれてありがとうよ。前のクスノキほどいい家は見つからないもんだと思っていたが、ここならもんくなしだ」

「しかし、なにもぜんぜん知らない山に住まなくたって、おれたちと一緒に寺に住めばいいじゃないか」

いちが言うのと、家鳴りは暗やみの中から答えた。

「お前にもいつかわかるさ。友達と一緒に空き寺に住むのが好きなやつもいれば、木のウロに住むのが好きなやつもいるってこと」

「そうかい」

いちは、どうにもなっとくできないまま言った。いちは、一人で暮らしていたときよりも、みつと一緒に暮らしはじめてからのほうが、ずっと楽しかった。

「じゃあな」

いちが言うと、家鳴りは「ああ」と答えた。
いちは、家鳴りはたぶんおれの最初の友達だ
ったな、と思った。

「おれは、友達と一緒に空き寺に住むのが好
きだな」

いちを元気づけようとして、みつが言った。

「もうダイダラボッチはいないのに、石巻山
に戻らなくていいのか」

いちが言うと、みつはうなずいた。

「また戻りたくなったら遊びにくるさ」

みつといちはまた何日もかけて、もといた
山へ帰って行った。二人の寺は出て行ったと
きのまま、あたたかくこぢんまりした姿でそ
こにあった。二人が庭を歩くと、木の葉の形
に影がわさわさと動いた。秋が近づいていた。
いつか柿の木を植えて、みつと一緒に縁側で
柿を食べよう、といちは思った。

それから、二人は秋が来るたびに柿を食べ
た。そして、山おくのくずれかけた空き寺で、
自分たちが大ききくらべをしていた妖怪だと

いうことを忘れて、いつまでも気ままにたのしく暮らした。二人はずっと三尺ほどの大きさしかなかったが、それでまんぞくだったということだ。